

## 巻頭言

巻頭言といえば名だたる先生方が執筆されるもの、という印象を持っていたが、最近は私と同世代の執筆者も増え、自身もそうした役割を担う年齢になったのだと感じている。

私は、世代としては決して若くはないが、日本惑星科学会との関わりは新しい。大学院修了後しばらくは地質学をベースとした研究を続けており、惑星科学会を主たる活動の場としていなかったためである。

大学院卒業後、比較的長いアメリカでの研究生生活を経て研究拠点を日本に移し、その翌年、学会が石垣島で開催されると知り、多少のよこしまな気持ちも手伝って入会したのが、関わりが始まりだった。入会当時、火星に関する発表がわずか2件しかなかったことは印象に残っている。その後MMX計画が立ち上がり、現在では火星・火星衛星のセッションが設けられるまでになった一方、リュウグウ試料分析の発表が2022年以降に急減したことは、分野の盛り上がりを如実に反映しているようだ。

日本惑星科学会において、このように分野ごとの盛り上がり比較的短い時間スケールで入れ替わる背景は、多くの会員が他学会を主戦場とし、あるいは複数の学会を掛け持ちしながら活動しているという、この学会の特徴にあり、それは同時に長所でもあると私は考える。良い意味で“腰が軽く”，分野横断的な議論ができるこの環境はきわめてユニークであり、単一セッションを基本としてきた運営方針も、こうした学会の特性を生かすために、諸先輩方が長年にわたり築いてこられたのだと受け止めている。

今後、惑星科学分野には、アストロバイオロジーを始めとした新たな潮流が加わっていく。時代とともに扱うテーマは変化していくが、自由闊達で横断的に議論するというこの学会のコンセプトは、次世代へと大切に引き継いでいきたい。若い研究者が多く、さまざまなバックグラウンドを受け入れながら共に研究をドライブしていける点こそが、日本惑星科学会の最大の強みである。

「自由で、公平で、競争的で、年齢や立場を超えて尊重し合える研究環境を作る」という私自身の目標は、すでにこの学会の中で実現されつつある。その貴重な環境を、より良い形で未来へとつないでいきたいと考えている。

白井 寛裕(宇宙航空研究開発機構)